

若槻泰雄著『外務省が消した日本人——南米移民の半世紀』毎日新聞社 2001年 249ページ

この書を読むと日本の移住政策が一貫して棄民政策としての性格を強くもっていたことを改めて実感する。著者は外務省の外郭団体の職員として戦後移住に深く関わった。とくにボリビアのサンファンへの移住事業では、自ら文明から隔離された原生林で農地を切り開き、道路、医療、教育の整備などで陣頭指揮に当たった。こうした経験から著者は、外務省の移住政策が情報収集、受け入れ国政府との交渉などでいかに杜撰であったか、移住者への耕地提供、金銭的支援などの約束でいかに詐欺的であったか、その結果多数の移住者を深い森のなかで困窮と病苦に追いやったかを厳しく批判している。戦後の中南米への移住政策は、ボリビアに限らず、ブラジリアマゾン、ドミニカ共和国などでも、誤謬、虚偽が伴ったことが広く知られている。戦前の方がまだ、外務省にしる民間会社にしる、移住地について綿密な報告書を著し、率直な意見を表明していた。外交と邦人の保護は外務省の主要な役割であるが、戦後の中南米移住ではそれらがほとんど省みられず、その結果移住者は多大な苦痛、犠牲を強いられたのである。

(小池洋一)

立野淳也『ヴードゥー教の世界——ハイチの歴史と神々——』吉夏社 2001年 190ページ

ハイチの国教はカトリックとされているが、国民の多くは、ヴードゥー教と呼ばれるアフリカに起源を持つ民衆宗教の信者でもある。ヴードゥー教は、特定の教祖、経典を持たないが、踊りを中心に複雑な体系を持つ形式化された儀礼を発展させてきた。ハイチの人々、文化、社会を理解するにはその理解は不可欠である。

本書は、ハイチの黒人奴隷、その蜂起の歴史をヴードゥー教の成立、発展の背景として叙述した後、ヴードゥー教の神々、儀礼、宗教的特質をわかりやすく紹介している。

人間による直接の信仰の対象となる神々（400柱にもものぼる）と人間からはるかに離れた世界に住む最高神という神の世界の序列が存在すること、儀礼における憑依も、無秩序に行なわれるのではなく、演劇のような決まった役割が与えられてなされていること、など興味深い事実が指摘される。(米村明夫)

ビクター・バルマー＝トーマス（田中高ほか訳）『ラテンアメリカ経済史——独立から現在まで——』名古屋大学出版会 2001年 359ページ+120ページ

自然条件に恵まれ、幾度か発展のチャンスに恵まれたにも関わらず、過去2世紀の間になぜラテンアメリカは先進国の地位に到達するのに失敗したのか。また、植民地時代から引き継いだ国家間、ならびに各国の国民のなかでの際だった経済格差がなぜ解消されなかったのか。このような問題意識のもとに、著者は専門とする計量経済学的手法に歴史学の視点を加味しながら、独立後のラテンアメリカの経済発展の歴史を辿る。その際、導きの糸とするのは、ラテンアメリカの経済発展の経路は三つの条件、すなわち、輸出商品の当たり外れ（需要の所得弾力性が高いか、輸出部門が前方連関を持つか）、輸出主導型成長の構造（非輸出部門の発展を促す資本移転、市場創出、財政支出などが行なわれていたか）、経済政策（政策は一貫していたか、一貫して実施されたか）の三つの条件に規定されたという著者の基本的な考え方である。ラテンアメリカの過去2世紀は、これらの条件の度重なる不運なめぐりあわせの歴史

であったことが、豊富な統計資料と歴史叙述によって明らかにされる。

著者は国際的に著名な英国のラテンアメリカ経済の研究者であり、現在はチャタムハウスの通称で知られるイギリス国際問題研究所の所長の重職にある。国際的に高い評価を得ている本書を日本語で読めるようになったことは、ラテンアメリカ経済に関心を持つ読者にとってきわめて喜ばしいことといえる。訳者のご尽力に深く敬意を表したい。(星野妙子)

**青木康征著『南米ポトシ銀山——スペイン帝国を支えた“打ち出の小槌”——』中公新書
2000年 208ページ**

1545年に発見されたポトシ銀山は、たちまちのうちにスペイン植民地帝国の最重要な経済拠点に変容した。本書は、そうしたポトシ銀山における銀生産の歴史を中心に論述が展開されている。労働力としては当初エンコミエンダ制、後にミタ制という名のインディオ(原文)の強制的動員制度が導入され、ミタ制導入後はミタ制度そのものをめぐる改革の行方を克明に追っている。また、生産方法として水銀アマルガム法の導入による生産増大の様子が語られている。このように本書は、ポトシ銀山に関する個別研究として日本におけるスペイン植民地経済史研究に貢献をなしているといえる。

他方、ポトシで生産された大量の銀の多くは、パナマ地峡をとおりスペインのセビリアへと陸揚げされた。そこで新大陸からの銀は、王室向けとインディアスに供給された商品の代金等に充当される民間向けに大別された。ハブスブルク・スペイン王家は、ヨーロッパ各地で紛争を抱え、莫大な借財を重ねていたという。ポトシの銀はそうした借財の返済の一部に当てられていた。また、セビリア商人の扱う商

品も外国産が多く、ポトシ銀山の銀はその支払いのために外国に流出していったとされる。このように、本書はポトシ銀山の個別的歴史記述のみにとどまらず、それをスペイン植民地経済史全体の中に位置づけて論述している点も評価される。(宇佐見耕一)

桐山孝信著『民主主義の国際法』(大阪市立大学法学叢書52)有斐閣 2000年 260+ iii ページ

本書は、表題にあるように「民主主義」の概念の変遷と、民主化のために国際機関がどのように関与するかについて、国際法からのアプローチを行なっている。冷戦終結後、ラテンアメリカを含め多くの国々が民主化を達成したが、その過程で国際社会、とくに国連の働きかけも活発になっている。他方、民主化手続きは国内政治の範疇に入るものであるため、一部の国からは国内管轄権侵害にあたりと批判が出ている。

本書では、民主化過程や選挙に国連が積極的に介入することの法的な是非について、国際法上の根拠を検討した後、とくに中米和平の進展の中で国連の介入がどのように承認されてきたかを検討する。具体的なケースとして取り上げられているのは、ニカラグアとエルサルバドルおよびグアテマラである。前二カ国については、内戦終結の際に行なわれた選挙とその国連による監視が、グアテマラについては内戦と人権侵害の責任を含む和平合意が、どのような条件の下に行なわれたかを分析している。

叙述は時系列的なので、論点を中心に読みたい向きにはわかりにくいのが、民主化問題を国際法の観点から検討したものは、国内では他に類書がなく、国際法学を専門とする読者以外にも、政治学や地域研究の観点から興味深く読める。(山岡加奈子)

後藤政子『キューバは今』（神奈川大学評論ブックレット17）御茶の水書房 2001年 63ページ

本書は、神奈川大学評論ブックレットの17冊目で、現在のキューバ（統計やその他資料としては1999年までのものが使われている）の政治・経済・社会についてコンパクトにまとめられている。分量としては多くないが、長年キューバ研究に携わってきた著者の筆になるものであるから、分量は少なくとも内容は問題点を押さえた非常にまとまったものになっている。内容はキューバの政治経済改革が中心で、革命前後の状況をふまえた上で、90年代のソ連崩壊後の経済危機の時代を中心にまとめている。

惜しむらくは、個々の政府の政策やその効果などの事象について、その原因となる要因を一部しか挙げていない例が散見される。

例えば自営業者の数が1997年から減少・頭打ちになった点について、著者は自営業者に対する所得税の導入を原因として挙げている。確かにこれも主な原因の一つではあるが、自営業者が許可された仕事をする上で物資の調達を闇市場に依存していた点も挙げられるべきである。この問題の背後にはドルと国内通貨の二重通貨制度の歪み、および政府による流通独占問題がある。政府はこの根本問題を棚上げして、自営業者と闇市場のつながりを、闇取引取り締まりと違反業者の許可取り消しというトカゲのしっぽ切りの方法で断とうとしたのである。また、自営業許可の取得手続きとその基準も不透明で、希望者全員が許可されているわけではない点も指摘されるべきだった。

いずれにせよ、ここ数年のキューバの政治・経済について知りたいと思われる向きには、論点がよくまとまっているのでお勧めの本である。

（山岡加奈子）

フェレイラ・デ・カストロ著 阿部孝次訳『大密林—A Selva』彩流社 2001年 308ページ

本書はポルトガル人の小説家フェレイラ・デ・カストロが1930年に執筆したA Selvaを、ジョルジ・アマードのCapitães da Area（邦題『砂の戦士たち』）などを翻訳した阿部孝次氏が翻訳したものである。本書の舞台は、ゴム・ブームの退潮期にあたる1910年代末から20年代初頭にかけてのブラジルのアマゾンであり、セリングイロ（ゴム採集人）として同地での生活を余儀なくされたポルトガル人の一青年の目を通して、当時のアマゾンの大自然とその社会構造が鋭い描写により描かれている。著者であるカストロは、12歳からの4年間をセリングイロとして実際にアマゾンで過ごしており、本書は著者の経験に基づいて執筆された自伝的小説である。

本書の構成はゴム採集地へと向かうアマゾン河の旅程、セリングイロとしての苛酷な生活、ゴム採集事務所での勤務時期という三つの部分に大別され、全体が15の章から成り立っている。アマゾンの大自然を描写する緻密で臨場感あふれる表現力の素晴らしさもさることながら、ゴムに依存するアマゾンのモノカルチャー経済の中で常に搾取される存在であったセリングイロの生活が描かれており、当時の同地域における社会の支配構造を読み取ることができる。また最後に、奴隷制廃止直後のブラジル社会の矛盾が衝撃的な結末をもって描き出されている。本書は、ブラジルの貧困地域と呼ばれるアマゾンおよび東北地方の20世紀初頭の社会を、文学という表現方法を用いて鋭く描き出した優れた作品であるといえる。

（近田亮平）